

小磯記念美術館 外部評価

Ⅰ 決定事項

外部評価の数値を以下のとおりとする。

- 展示内容：4.1
- 研究・普及・啓発・連携：4.4
- 経営状況：3.1
- 施設設備：4.0

2 委員の主な発言内容

(1) 外部評価の見方・総論

・展示内容と研究・普及がともに高得点なのは整合的。両者が乖離して低評価になるよりは望ましい。

・経営評価は数値で測るしかなく、収支のうえでの赤字を背景に評価が下がるのはいたしかたないとはいえ、問題があると思う。（本来の設立目的である展示内容などが良ければよいのではないか）

・市の総合基本計画を策定する議論の中で、従来の財政面だけを図る指標ではなく「幸せ度数」等を指標化する動きがあった。美術館の存在が市民の誇り・文化度向上に寄与することを数値化したらよいのではないか。

(2) 学校連携・校外学習

・小磯記念美術館は、校外学習という面では、交通の弁や昼食を取る場所がないなど、課題はあるが、候補としては重要な施設である。館側が整備を充実することによって、さらに普及が高まる可能性があると思う。

(3) 施設設備

・小磯記念美術館は、こじんまりして最小限の施設という印象。展示室やロビーよりもむしろ、トイレの清潔さなどが重要で評価に影響すると思う。

(4) 広報・来館者層

・若年層は来館するための時間確保が難しい。そのため、学校連携の重要性が高い。

(5) 作品・企画の世代ギャップ

- ・昭和の作品でも現代若者に新鮮に映る可能性がある。東郷青児などモダン性の再発見の例もある。

(6) 立地・回遊性

- ・美術館で入館料を負担した後レストランで食事ではコスト的に厳しい面もある。低コストのスタイル（美術館での鑑賞後に公園で軽食など）も許容する文化を醸成する議論があってもよい。ただし、近隣住宅地へのマナー配慮が必要である。

(7) 特別感の創出

- ・神戸建築祭の成功事例がある。（※須磨と垂水などの神戸の記憶を受け継ぐ歴史ある建築物を期間限定で特別公開するイベント。洋館や近代和風住宅建築などを中心にパスポート公開やガイドツアーを実施。目標 500 人のところ、1,000 人以上参加）

これは、普段は見られない場所の期間限定公開が強い動機を生んだのだと思う。美術館でも「今ここで見る必要がある理由」を明示し、来館する必然性を生み出すべきだと思う。

(8) 教育的普及の方法

- ・作品の背景・制作技法などの事前学習が本物を見たときの感動を増幅する。美術館からの一律レクチャーは難しいが、学校側で工夫可能である。そのために教育現場に対して、子供たちに伝える方法についてのヒントを発信するとよい。
- ・ワークショップ等の活用を検討するとよい。